

台湾徒然

第46回

兵役廃止へ

徴兵制度に基づき兵役につくことを

台湾では「当兵^{タウビン}」という。「当兵」は台湾の若者にとつて人生の大きな関門になってきた。高校あるいは大学を出てから平均2年、ときには金門や馬祖といった離島に飛ばされることもある。日本語学科で4年間勉強しても、2

年余り、語学とは無縁の暮らしに日本語会話もすっかり忘れてしまう。世間によつと戻れば、同級生の女の子は貿易会社などですでに主任や係長についている。そうした惨めな思いを男子学生には聞かされてきた。近年は集団生活が苦手な子供も増えて、「当兵」もなく自殺してしまう事件まで発生している。

しかし一方で、暫し学窓を離れて心身を鍛錬することで思いやりのある好青年に生まれ変わったという声も耳にする。いづれにしろ、青年期の2年間はとてつもなく重く大きい存在だったはずだ。

その「当兵」がなくなるのが決定した。徴兵制度を廃して募兵制度

にかわるのである。実施されるのは2015年というから、実現すると、1995年以降に生まれた少年は「当兵」の心配から解放されることになる。そうした一大改革の背景には、もちろん

21世紀、兩岸が抗戦するという可能性は限りなく少なくなった。すでに台湾も中国もその経済は二人三脚で走っている。鉄砲の弾なんか投げ合っている場合ではない。直航便が毎日台北空港から中国各地にビジネス客をのせて飛ばす、大勢の観光客を運んでかえってくる時代である。兵役廃止も当然の成り行きと受け止められている。

兵役完了が就職の条件だった企業形態も含めて、若者たちの人生設計は大きく様変わりすることになる。さて、台北観光には必ず組み込まれている「中正記念堂」——。頂部ま

での高さ30メートル、89段の階段（蒋介石の享年に相当）を上ると、かつて

「皇帝」として君臨した蒋介石の巨大な銅像がそびえている格好だ。その両サイドには始終、衛兵が微動もせずに屹立している。1時間ごとの衛兵の交代式が観光客のお目当てで、定時に集

まり、フラッシュをたてる人垣の中にも大陸からの旅客が目だつて増えているところだ。彼らはギフトショップで蒋介石グッズを大量に仕入れて帰途に



蒋介石銅像前の衛兵交代に向う兵士たち

着く。

台湾観光に貢献する、ここの衛兵たちもみな「当兵中」の一般家庭の子弟たちである。基準に見合う体格をもつた美青年が選抜されて、その任につく。「独裁者を警護するなんてとんでもない」と、これら衛兵の配置は陳水扁の時代に廃されたものの、馬英九總統が就任するや、当然の如く復活した。中正記念堂を台湾民主館に改称した当の本人は、ただいま汚職の罪に塗れて拘留所暮らし。台湾は大きく進路を転換したのである。

銅像の鎮座する空間は真夏には熱気がこもり、30度をはるかに超すが、屹立する衛兵たちは汗を拭くことも許されない。凛々しい顔を覆うヘルメットには中国国民党の青天白日のマークである。陳水扁の時代はいつたいたいなんだったんだろうとの思いを抱いてまた89段を下る。

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。99年度「潮質」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たち」の聖歌（現代書館）「台湾革命」（集英社新書）「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）